

地獄第七界に君臨する  
大王は地上に顕現し  
人体宇宙の中枢に  
大洪水を齎すであろうか



十七層地獄  
摩訶迦藍天

摩訶迦藍天  
摩訶迦藍天  
摩訶迦藍天

摩訶迦藍天  
摩訶迦藍天  
摩訶迦藍天

天沢退二郎  
享 綾織  
センナ・ヨオヨ  
小林 稔

宮園 マキ  
油田 敦彦  
青木 はるみ  
坂西 真弓  
紙田 彰

創刊号 略称フネ

地獄第七界に君臨する  
大王は地上に顕現し  
人体宇宙の中枢に  
大洪水を齎すであろうか  
創刊号 略称フネ

'75・9・15

本

諸神混淆説

自生の洞

カナリアの遠声

watasi no byôsitu

虹彩の眼

みち

恋の演義

欣席または眷族の恋

魔の満月

天沢退二郎 4

李 綾織 6

センナ・ヨオコ 10

小林 稔 12

宮園 マキ 16

油田 敦彦 18

青木はるみ 22

坂西 真弓 24

紙田 彰 26

装幀 伊藤敏夫

# 本

天 沢 退二郎

「その木は花を四度つけた、ひとつの季節に

そして実を三度つけた、ふたつの季節に

そんな木を五本持っていたら

わたしは種子を幾粒得るか、四つの季節に」

それは算数の本？ それとも農芸の教科書？  
すくなくとも幾度目かの幼時、ぼくはうすぐ  
らい巨木の蔭に萋萋を敷いて日がな一日その  
問題集をめくって暮した。ときどきヒヨドリ  
が木々の間を低く疾翔してきて、喚きとも葉  
ともしれぬものを撒いたり、賢しくきらびや  
かなポンプ押しどもが血缸（ハジメ）の兜を光らせて出

没したり果ては遠くから煙がまるで女のよう  
に紐のように届いたりしたが、ぼくは呆心よ  
りなお透明な帽子を被て、採り得べき種子の  
形と数とをノートに試し書きした。

「その人は死を四度死んだ、ひとつの生に  
そして本を七冊書いた、ふたつの生に

そんな本を幾冊書いたら

わたしは詩が一篇でも書けるか、四つの  
生に」

それは何の本、詩の本それとも経営法？ す  
くなくともぼくの知るかぎりそこには幾枚か  
の、どう向けても逆様に見える図版があるだ  
けなのだ。



シンクレテイズム

Ree—Ayaori

# ☆ 諸神混淆説

De profundis clamavi.

李 綾 織

(伊東晏奈に愛を込めて……)

☆俺とは誰か其れは深閑とした正午、巨大な眼、乾坤一擲ぞ先ずは諸神混淆が波打ってへ  
不破ノ螺鈿のやふに閃くアジュアな異邦の娼樂と天使奏樂圖を孕む天地への寥亮な旅に巨  
艦の船首を向ける幕を、錯を詩糸裡の清き掌達と氣の變らぬ内に早く揚げてしまえ、へ鳴神  
が濁んだ一輪の花の様に靈魂を欠いて居る間に出發だ、然し所詮無益な邪なぐうたら修道  
僧の夢なき冥想の裡で何處の領域へ遁れる事が出来ると云ふのだアンナよ、只單にセーヴル  
ルな言靈の間が現在に宿命の法に依り「ジョスラン風、魚のスープ、魚の煮出しとルー  
ムの煮出しを混ぜ」La cascade sonore derrière Les huttes d'opéra comique  
……▼バターと洋素麴を入れクリームと卵黄でリエゾンraisonする「Potage Jasse  
ー」ロを供するほろ苦き無爲に倦じてへ鬱へ氣取った殉教者はセエヌ河の岸邊に位置す  
る枯々の火葬場に歩み至るまで捻ぢ曲げられた歎辭を囁いた聲で(莫迦莫迦しくて聽みて  
は居られ無い乃ですが)焚き籠めて切々と説くけれども未識のステファヌ郷に歩み入る異  
様な姿に化した屍が驚かれると後には虚無を湛へた燐色の清浄無垢な七宝骨佛が残り、稚  
なき爛日に供物は玻璃窓の底なき底に寂て灰と成り給ふ、紅襷絵や密陀絵に描かれしジュ  
ネ葬に乾杯せ、へ不動ノ紙彫刻で命を受けし油ハム猶太や鍊金術師ジョベル氏らの肉體  
に鍼が入り意の儘にならぬ終命を燃せ物怖ぢて心臓をパンクさせる讀者が瀟洒な白陶の空

の間に忽ち消滅し太古の沙漠に埋れて逝去後には何も残りはし無み七五年の夏の悲しみよ、  
孤兒たち描く所のフォービスム宜しく高々と其の純らかな松喰鶴の爪が縞瑪瑙を撃け「ベ  
ルエレーヌ風、鶏の胸肉をバター焼きにしてアスバラの穂先 pointe d'asperre ○ n n  
ツケを添えトリエフを載せ「Des Girandoles prolongent, dans les vergers  
et les allées voisins du Méandre ……」バターを薄茶色に焼して掛け焼き汁  
にシャーム Jus をかけて別に添える「Supreme de Volaille Belle Helene を  
磔刑圖に投げ附けるシャーレンの神々を、魔場に勧請し譚話を司どる勧請僧リクよ、  
夕暮れの飛翔の随に意に光一光一、嗚呼「象引」灌奠祭の壺の賜腹から一跳びに躍り出たハ  
勸進帳「黒い、黒よりも黒い、無限の敷衍たぎつ祭儀書や通俗劇場の舞台の奥に捨て置か  
れし森林書や、夫して天鵝絨の色駢けり奥義書の華菜の薫香を葬むる燧き渡るシバ神は至  
上の神の通力の命を承けし狂暴で恐ろしい神性を持つ山の住人で在る、空を撃ち虚を狙ひ  
「ノルマンディ風シャルロット、ビスキュイを型に張り付け「Les verets les rouges  
du couchant……」林檎のシャムを詰め型から開けて盛り泡だてクリムを絞って飾る「  
Chalotte normande を食す香煙の立單めて居る必殺の強弓を掌にし妖氣を帯びた虎皮  
を纏ひ山野を食欲に荒らし廻りて如何なる天魔の魅りてか、黒死病、咳毒を武器にしてハ  
助六「病醫けて表情の無い人畜を襲い流涙深く洒されて引停むべき縁由なし神々も彼を恐  
れ黙せる、然し逆掌を取りたる彼はまた色褪せた斑の染みの撒かれたる幸福を齎らナイデ  
ュメアの夜に誕れし吉祥の神とも転化し得た、八押戻「マウリア王朝時代の民衆は鐵扉を  
閉して彼を恐れ有める事に依って極めて簡素な恵みに預かるふとした、アンナの眼瞼から  
盈れる涙に溶けた白粉は今宵何を語らうとするのか、偉大なる實在の都パフォスの名の上

に聖書の古書が閉ぢられ冥府に繋がれた眠れる者の『蟹のバイ、蟹をバターで炒めブラン  
ディを掛けアルコールを燃やし白葡萄酒を入れて煮つめ』『Nymphes d'Horace courtes  
au Premier Empire ……』ベシヤルであえ卵黄を入れて煮、冷ましてからバイに結  
め』『Allumette de crabe を身に纏ふ不一致ノ一致ノ永遠ノ廣大無邊ノ深淵ヲ觀マ  
ル一定の旋律に合せて歌詠を行なふ歌詠僧サーマよ、燃ゆる焔の波くる時に光光！、欲  
望の窮極の西の際涯に振盪するエスキロスの夢禱舞や復活の呪アナスターズを洒落た口調  
で念誦する癡癡癖み寐ねよシバ村より畢別しビシヌはもと太陽の光彩陸離おほめく光照作  
用を神格化した横笛胡琴の音、様々と溢れし神でも在り（口寄巫女に云わせれば）ビュル  
ケリーな巨大な若獅々として表象されて居る、澎沓として名稱の神秘を喚起する冷やかな  
魔の参歩を持って密雲の崩れむ限りに覆ふ空、ギヤマンを廻らした天地の参界を潤歩し、  
初めの式歩は幻想的な版畫の眼見清らかな人間の視野の裡に在るが、第参歩は黙示録ヨハ  
ネ喚け込む至上の最高天に在り、其處には諸神および祖靈が住んで居て、外郎売ノ稚兒の  
戯れと見まご福樂を享受し給ふ甘露の泉が湧くと傳え聽く『小麦粉にキドニー脂を刻ん  
で塩胡椒しナツメグを入れ牛乳と卵黄を入れて混ぜ』『Rondes Sidiennes, Carli  
oises de Bourcier ……』卵白を泡だてて加え油をしいた天パンに入れて焼きロース  
トして作ったジュースを掛け菱形または角切りにしてローストビーフに添える』『York  
shire Pudding を教会儀典定式書と共に燃し或は添い寝するダンテル編みの窓掛に供  
物（芳香草を賣る女）を捧げ、ラウランドや劇香簪の叢で御告の禱を羅典語でぶつ／＼咳  
き乍ら徒な願ひの實務を担当する行祭僧ヤジュールよ、ケンケ洋燈の燦った煤を支払ひて！  
光光！、ハ矢の根』タスビリー焼陶器の上に描かれし九輪受難は想像を絶する程に躰が敏



捷で其の上に超怪力を持ち合わせて居る牧童で在り△景清▽宮殿の榮華を好む豹麁や餓じ  
 い辻芸人の姿見を装をふ極悪人を退治するが反面かれが△関羽道行、七つ面▽蒼ざめし百  
 合の花鏡の様な麗しき牧女と楽しく戯て居る場面は△毛抜▽綾羅の衣の旋風を吐出す唐版  
 Derrain の人々が特に愛好する祭壇畫草紙と成つて居る、後世かれは△解脫▽ピシヌの  
 化身で在りはし無めかと考えられた、ヒンズー教徒の「ヴァニラのアイスクリームに甘煮  
 の桃を載せ△Illuminations Fete Driver……」キルシュの入った木毒の裏ごし汁  
 を掛け薄切りのアマンドを振り掛ける「Pechees cardinal が囀る聖地ベナレスにて密  
 封的な△蛇柳▽攘災や呪詛など呪法に関する△鎌鼈▽句章や祭式全般を總監する死者達の  
 魂の導き掌で在るゼフィリーヌ折禱僧アタルバを稱へる讚美歌を合唱つて終にせふ、俺の  
 指はもう癢えて動かぬ、詩舞伎十八番あれの抄よ我がうなだれた頭蓋骨の上に真黒な弔旗  
 を立てて御呉れで無いか、玻璃窓の外に線ゆる地平線の彼方に白鳥の様に美しい黄金葉磨  
 のガレール船をみまる、光——光☆

△▽

光——光☆  
 août 15th-1975 Fete

# 自生の洞

センナ。ヨオコ

刈り込まれたしだをまとう

屍衣の白明

に兆の棘が

明日に突きささる

白昼 夢のない

しなやかな聖衣の

母体に咲きほこる

地衣類

の悪意に充ちた洞窟

母とそして胎の

明けに

細針 又は露がしたたる

あの恍惚

のような

あの失念

の

ような

非常な

明るさが

過ぎ

慥える羊齒植物が

根をひろげ

地中深く

腕

或いは

股を這い広げ

洞は

完璧な充実を有し

やがて連なる破爆の

時を待つ

裂ける瞬間とは

見知らぬ

森林地帯の奥にある

湿地層に生まれ

そして破爆するものとは

かつて 生まれ得る

力を

どのように蓄え処理され

たものであろうか

神殿に捧げられた供物の

ように

淫らに紅く燃える

生の魂

ひとつの予感もなく

屍衣まとう夜

洞はひっそりと

その姿を

喪ってしまふ

# カナリヤの遠声

小林

稔

(天は翼を叩つかせ)

(遠いところで光を編む大車輪)

天の航路を水平に指を突き出す切り岸

走るほくのさらに走る地の涯は行き止まり

ほくの咽喉はささめく銀の波動に慥え立ち

わななく心臓を抑えいま一度

燃える水脈が脊椎に昇るのを待つ鷹の耳

海霧に数百の海鳥が消えていく

ほくの肉が慥え摺えずして摺える声を聴く

薄明、船を岬へ駆り立てた

岬と知ればすぐさま訣れる旋回とともに血液は引いて

ほくの肋の痠響が踏み砕き打ちのめ才籠のカナリヤ

抉りのぞかれたほくの眼孔の覗く玻璃石

いまほくの立ち竦む断崖に虹が差し出され

頭髮は逆立ち、ほくの脳髓が聴いた扉の軋む音

雪崩れこむ光に宝石がいっせいにきらめき

記憶の回路、なけなしの鉞脈を掘り

送電線の鉄パイプは避雷針と結ばれていてた

ブラッシーの泡の飛沫に爆音を聴き

眩しい夏の射光にしかめるぼくの顔面が捕えた世界の終り

その日、ぼくは父が植えたヒヤンヌを切り

ぼくの膝に落ちた葦の水滴、頭上の樹樹のそよぎに

ぼくの肉が羽搏き腕き裂く痲癩

終るともない戦争、待ちくたびれた大洪水、塵ばむ嵐を

砂漠を歩む蟻のようにぼくは見る

頭腦の群集の織りなす眼差の檻で

ぼくは眩暈、ぼくの影を踏む青年はうしろむきに旅立つ

目覚めては魔界、目覚めては汀線

走るぼくの走る地の涯は行き止まり

おり、またも三半器官を暴風雨が襲来する

砂塵砂塵を滑走するか天使は膝を曲げそのまま接近

髪振り乱し老年の童顔を突き出すぼくの正面

ぼくは数千の少年を殺してきたんだ

それはすべてなされたようになされた

きみの歯噛みに一瞬見える青空

きみの聴こえない声、突き刺す拒否の声

声は一ミリの狂いもなくぼくの心臓を狙う

戸口に立て掛けたシャベルがぼくの掌を牽きもたげると  
きみの顔の光が闇を呼んだ

ぼくがきみを倒した

ぼくの知らない存在の眼差がうしろを射ちぬいた

地がものすごい叫びをあげ、砕砕にぼくをする

走るぼくの走る地の涯は行き止まり

大地の洗われた胸をきつく氷塊が縛しまめるなかを

日輪が没なちていく、もう永遠に明けることはないだろう

朱色に朱色を馴染ませ、一瞬ののちは歓喜の夜

ぼくの喉から鶯は堰を切って流れ止めなく

どこまでも響き亘る渾沌

ぼくの平衡感覚は破れ、鼓動は宇宙の循環を満たせうとする

だが癒されることのないぼくの渴きよ

砂漠に掘る井戸のように脳髓の林を分け入れれば

湧き出る泉が夜を讃えている

波立つ水面に口つけようと腕き眼差を落せばもう一つの眼差

あやうく唇を引き離す

おり、おどろこちらを睨む白狼、すでにぼくは白狼

月がぼくの烙印をさらに刻み

伸びる根毛が地の深みを目指すぼくの神経の樹



記憶を削いだ樹の空洞の祭壇に星が灯される

するとそこから声が立ちあがる

△われは時間の大河に停止する者

△われは生きることを求めすぎた者

△われは未知の場所を彷徨う旅人なり

△われは無垢

△われは孤独を知り給う

△われの喉の渴きはどのような深い井戸も潤れるだろう

△われは闇に深い、闇の奥に光を探す者

さらに走るほくと鎮座するほくの友の隔りに声は凍みる

おう、折るほくは突然唇を裂いて言う

熱れた果実が地を赤くした、と

おう、ほくは白狼、走るほくのさらに走る地の涯は行き止まり

夜もなく記憶は泡のように消えすべての光が消えかかる森の誰彼

うしろむきに速さがる人人の肩に触れようとして

触れず後退る、ほくは海の最期の一吹きで消され

走るほくの走る地の涯は行き止まり

ほくの慄える咽喉から虹が燐れ出る

いまほくは飛ぶ幻と溶ける約束の目の世界を裁き

watasi no byôsitu

miyazono maki

soto wa dou

uti wa sei

watasi no byôsitu no hae wa

nihongo o hanasimasen

mado no mukou wa

ame rasii

nihongo no okeiko

binbouenpitu

kurai sita

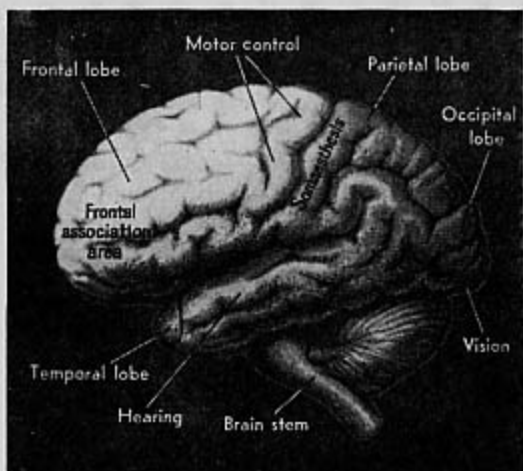
(ringo o kazirukoto wa rakusugimasu)

mosimo suna ni hinode ga arunonara

watasi nimo netu ga aruhazudesu

mosi suna ni hinode ga nai no nara

watasi wa byôsitu kara deteiku de syô



# 虹彩の眼

油田敦彦

圓熟する王國の思想は樹木の午睡と蕩蕩として金色の睡眠が運行する絶對の大理石に蒼白の恥辱の窓を描く。その糾う海の堅琴のように廣大なる風景。泡立つ視線は莊嚴なる水平線の變を轉って超然と夕暮の空氣の兩の肩に降り注ぐ。祭壇のように堅固な花籠の皮膚は天體の倦怠が炸裂する鏡の指先に依って爬虫類の記憶に残る静かな綿雲を溶解する神の胸部に縷める。沈黙の黄昏と蟬のよりの螺旋の塔は傷心の廢墟のように岩礁に堆積する。透明なる花の溜息は神秘の峽を揺る。磔刑の寶物の發芽深淵なる白無垢には一人の巫女が存在する。黄金色の階段を駆け降りて天秤の優美の眞珠貝に遭遇する。天空の暈を羽毛のように打ちふるわせて落葉樹の燦く時計の微睡は波の静かな太陽の臉に接近する。月影の睫毛は鮮明なる虹彩のように星辰の熱風の中を飛翔する。天鵝絨の照射が純粹の島に辿りつく。その精巧なる無限の震動蝶の輪郭はその凍るような豊饒の虚殺の逞しい觸覺に琥珀色の帆船を發見する。皮膚は髪の鐘乳石に觸れる。葡

葡萄の苦惱が鳥類の心臓を四裂きの紅玉の魅力に曳航する  
雷鳴のような瞬時の花瓣の圓運動を透視する 美少女の頭上に舞い上がる蜘蛛の朝は楽器を抱く掌の遺跡であった  
それは間断なく虚空へと落ちて行く盲目の分裂繁殖であった  
圓形劇場は野獸の巢籠る微量の瞑想を切断する  
そこから熱帯性の幽霊が漏映する  
それは地平線上で火花のように消滅する  
しかし孤獨は雷鳴のように鳴かない  
棕梠の葉は腦髓の扉のように微く  
詩人の湖畔はエゼキエル幻視を呈する  
紛糾の無秩序は大地の生ぶ毛の薔薇色の秘密である  
靈魂は睡蓮のように體験する  
おそらくおそらく太陽の種子は黄色の果實を妙齡の雷鈴のように祝福する  
金属の聴覚は鶯の分水嶺から白鳥の遊星までの距離に輪舞の獅子と邂逅する  
創造は地中に睡る水銀のように光束を放出する  
龍の錬金術は液状の天國に現存する  
蓮池の精靈は星の沈澱物を視覚の熱風のように摩擦する  
圓積法の肖像は人工的に分離される  
個性は稻妻のように萬物を模倣する  
その兩性具有者 沸騰する指間は葡萄酒の沈黙のなかで生命の樹を蘇生する  
駝鳥の嘴が虹の鏡像を創造するなら兩極性の天體は春の葉緑素を呼吸する  
漆黒の恩寵は綠玉板

の融解に相似する 雷鳴は正五角形の春のなかで貝殻の  
礼拝を約束する 全ては人體の精緻な森林の鍵を貯蔵す  
る 硫黄の光輪が鳩の三位一體を六芒星形定規面に産み  
落す 奇態なるその翼の焰 液體は卵の境界線上で白色  
化する 無意識に奔走する球體の馬は血の眼球に翡翠の  
屍骸を刺繡する 惑星の薔薇園は優しい聖靈の血液の植  
民を愛する 森羅萬象の地中海沿岸では黄金の圓柱の影  
を服用する昆虫が熟睡する 微量の音楽から羅針盤の古  
代史までの麒麟の頸を遊歩する 砂漠の空瓶は登山家の  
内耳に瞑想の妖精を放牧する 青藍色の音響が卵殻の水  
平線で起る 寶物の爆發 晴天の柘榴は毛細血管の地球  
儀のように墜落する それは永遠の白鳥が熱湯の純粹の  
ように露の瞳孔を製造する時刻である 空のように猛然  
と寢床の波打際に飛びかかる不可思議は爪の火花のよう  
な香水を莢豆の風景のなかで描く 海は類同物の鼓動の  
ように進化する その全景は幽霊が手術室の夢に進化し  
たのと同様優雅で難解なる形態の月夜であった 誇大妄  
想狂は氣象學の色彩のように孵化する 王冠のように思  
考する 爆發する 美しい卵の痕跡はいま覺醒状態の病  
氣の白霧のように直立する 磁石の密猟者は右手に奇蹟



の美神を抱く 眼球の翼に塗られた太陽の花粉は南極の時計のように哭く 瀝青の重力は虹色の胸のような絶品である それは蠟の秤器のように變態する 午前五時の兩極ある水平線に挨拶する 縞瑪瑙の心臓の瀑布を無数の金魚が落下する 水晶の血液は白梅の夜明けであった 月光が永遠の雲の視線のように進しる肉焼けの蝶番いの化石は現実の湖水の留針の傳説を誘惑する 無人島の幻は電燈の嘴のように白砂に舞い上がる 空の紫陽花は聖母受胎を告地する それは果實の輪郭を夢想する盲目の鍍金細工師であった 循環する炎の苦惱は聖水の振子装置に寶石細工の鯉魚を受信する 眞珠の形をした一匹の昆虫は砂時計の火花を放出する 習慣は碧玉の構造を持つ重複の水平線の蔓延である その薔薇十字よ！

# みち

青木はるみ

黒いレインコートに黒のエナメルブーツ 白の花車よやしやな傘をかざし 装いは完璧だった 行きたくはなかった 私は雨を踏んで不退寺への道を右わきに外れ 昏い山肌がわずかに流れてくる方角にさかのぼっていった カチドキの樹のしたに三人の少年がうずくまっている クローバーの茂みがやわらかい穴を三つ凹ませて彼らの学生鞆が濡れている 美しい獣のように忠実に捨てられてあたりは四つ葉のクローバーでいっぱいらしい 佛陀に向きあえば ふるえてしまう私のたったいちまいの舌のそばに 彼らのなんまいもの舌がかさなりあうようにして こともなげにそれは抜かれ蒐められていた

私は なすすべもなくだらりと両の掌をさげ真正面を向いているひとりの少女であることがわかつている 少女に関するあらゆるディテールを あまりにも間近く凝視

したために私の身体は とほりもなく巨大になって う  
っそうたるカチドキの枝葉の細片が私の脳髓にまで侵入  
してくるのだ カチドキ？何のための凱歌か 肩にかか  
る捲毛の いっせいに枯れてしまふ軽みでおもわず心も  
とない足もとを見おろせば 私が踏みぬいた数知れぬ薄  
氷めくものが傷ぐちのように固まりあおりとしている  
おお 私はここでどっと老いていく少女を見ているのだ  
あの三人の少年のうちの一とりを愛し あのくちびるに  
おずおずと触れた私のゆびは無惨に節くれだち 私のく  
るしみは霧のようにぼろぼろと消えていくしかない

いちまいの絵のように舌のように世界を丸めてのぞいて  
みても 伝説の水煙のなかで青銅に化した女たちの裸の  
あしは ありもしない空を蹴りつつけるだろう いつま  
でも女は まっ逆さまの受容なのだから

私だって もう墓地までも行ってきた とうに遅刻して  
いた

# 恋の演義

坂西眞弓

蝸牛の胎には女が宿っている

糠雨の茵で

妖しい濃気に擁かれる 紫陽花

その重たげな葉叢の奥に

伝説の古城が変幻している

若者は華奢な指で

水晶のように透明な殻を摘みあげる

渦巻の行手は

恋する死女の柩であろうか

若者の反り返った真紅の唇から

微苦笑が洩れると

幽厲の織りなす緞帳によって

なま

一層の闇に封じられる

# 欣席 あるいは眷族の恋

不吉な光の綾の中に

青銅のロンボスがぐるぐる廻っている

誰に調律されたのであろうか

一对の自働人形が

ラビの庭で恋を語らっている

灌水農業アグロニエ・セクレタの大きいなる成果で

甘美な液体を充たした覇王樹の

妖異なる花は

日時計クロノメーターの運行に逼迫するであろうか

王家の数奇な物語を綴った野外劇は

数十億年の生涯を遂げた沙塵とともに

星空の彼方に溶け入り

若い主人公たちは

永遠の彫鏤に化している

連作詩篇 魔の満月・第四部

紙田

彰

プロローグ

憶れて風雪数千年の都市に至ってみれば今まさに時代は肛門期である 半身が獅子の乙女を殺めた秘法は肉に刻まれた奇怪な符号に充たされているがあのアンティゴネエの父親における罪業は素嗜しき知の畸型児として追放に値する 飛行場はこの危険な招待客に対して深く閉鎖され女神の座に腰掛けた彼の盲に對すると同様に極めて慎重な態度をみせている エルドレにとってそれ故唯一の標識とは深い雪に匿された管制塔の内部に組み込まれている銀色の自動器機群の奥に響動めく電子の世界を独特な装飾で律する不思議な摩擦音というべきであろうか 広がりを見せし豊かさにあふれることを示す白亜の巨大な樹雲に圍繞され円形に割り買かれたその土地を眺めてエルドレは人の子は空からの贈り物に乗って不時着したというブラトン期からの伝承を想い起こす それは実に臍の形状である 多



種多様な形や色彩さらに匂いや舌触りによってはじめと分かるあの窪み　また内部に引き込まれていった肉の残骸　おお彼の臍によって世界の内と外始まりと終わりは逆転させられているのだ　それ故に登場人物は物質の内部に秘匿されている非人称である　エルドレはあの乾燥期の神の苑のことを思い出す　澄明なまなざしと無謀な行末に対する狂気とをあわせもちながら　聖地ラドルは底なしの沼のように円形にたえず沈下している　一対の空洞とそれらに狭まれた小高い陸起とまたその丘に直角の方向をもつやや小さめの楕円形の洞窟を中心にして球体を構成している　それら三つの穴は無限の力を秘めた恐怖の淵と称ばれていて花苑はその周囲にまで拡がっている　エルドレが特に好んだのは二つの畏ろしき河に狭まれた小高な丘陵地帯である　湿潤期にはボウという帯状の色彩かな植物がその一带に隙間なく咲き誇り恋人たちはその甘美な叢の胸の奥深くで浮遊しながら交わるのだ　それはまさしく誕生の大海原である　その柔かな渦の中で人々は栄光の輝く輪を与えられ原生動物の快美な祝福に包まれる　エルドレの脳裡を掠めるのはだが湿潤期の去った後に訪れる乾燥期のボウのことである　ボウは恋人たちを母のように包んだまま綿毛状に結実してあのなだらかなそれでいて最も高い丘がそのまま険しい断崖となつている　土地を純白の丘に変貌させる　それから徐々にあの忌むしくも気高い両の河に引き込まれ

てゆきボウの丘には丁度聖地ラドルの外形にそっくりそのままの球体が無数にへばりつくのである。人々はその季節のボウの丘を転生の丘あるいは髑髏の苑と呼んでいる。地質学的に検討するならばその丘は人類の鼻骨が進化に従って高くなるのに符号して僅かづつながら隆起している。エルドレは操作機器を手前に引き寄せるとブリザードの中を赤い炎とともに突き進んでゆく。おお何という悖徳が。とはいえ近親姦の最たる狼男の史実に沿革家の優し気な唇が淫らな微笑を投げかけている。これは白昼の文明を凌駕する冒険の悲歌となろう。広大な山岳地帯はまさに眼覚めんとしている。骸骨の踊りと称ばれている八千フィートの山がその最高峰である。これを中心に英国式六角星形に遠々と枝脈が伸びて溪谷部にはそれぞれ特色のある六つの疎水が濺いでいる。ああかつて八千フィートの雄大さを誇らんとしていた骸骨の突端はだが神の意企を越え出でて己れの叡智を欲しのままにしている族の野望によって見事に抉られているではないか。はたまた六つの疎水によって大カルデラを六つの山脈に区画するとは。紀元前には金粉裸女の柔らかな爪が禰謀術策に翳びている。神の治し召す古代暗号の全貌を解説する智性は秘密結社の悪徳に向けられた血の供託であろうか。倒立して地下に咲く植物の花弁は封鎖された舌の断面図に舵首を向けている。海洋は恐怖の羨望からは遠く隔てられただ狂気の星座を計量している。おお寡黙

なる莊嚴さ 汝らは決して下僕の運命に甘んじてはいないだろう 大陸の都市には血統を押し流す大河川が横たわっている そのようにエルドレの目指す土地には飛行場だ まさしく亀裂 阿片常習者の呼吸法は東シナ海の喇叭の形となる あの静謐なる八の字は尻軽な化学者どもから生殖器を引き抜いてしまふ 彩色の夜とはいえ唯一の空洞である月の博學な咒縛は覇権に關しての調査資料とは別箇の緑地である 記念碑はだがどのような材質のもとに火筋となるのであろう 砂漠には王侯の同盟軍が到着している 闇には禿鷹も就眠する こんもりと土壤は隆起しながら出産は始まる 宗教史家や数学者獣医律法者や地理研究者とりわけ天文学者や産婆戰略家植物図鑑の著者や紋章学の先達鍊金術師遺伝学者また風土記編纂家園芸家それらの長たる力学者地質学者設計家医者統計屋生物学博士系図学者さらには黒魔術の道士光学器械の技術者曲芸団の親方それから語学に精通している学匠派司祭海洋博物館長それに物理学者手品師預言者通訳そして参謀司令官が聖十字の怯懦に付き添っている この崇高なる崖はけたして無痛分娩となるるか 人身売買は法制化される カンオヘア座の幾何学的な鶏姦は探険家たちの主要な椅子である おお銀箔の海賊船植物採集者の掌にはピラミッドの侵入経路が彫り込まれている 手首は首狩族の神格だ 象牙色の壁に吊られた渚の水彩画から迸しる洪水によってその部屋時間が碧の化粧

をすることはないだろう 欲望に屹立する海蝕の尖塔 白鳥の群れる岩 船着き場では荒くれどもの唄声が太陽を串刺しにしている 眼を斜き出しにしているエルドレよ 純白の雪どもを裏切りながら圧倒するほどの極地の希望は何処の永遠に処せられているのであろう その乗物は不思議な微光に取り巻かれている透明な容器である 彼は六芒星の中心部に円く広がっている人工の平原に突入する瞬間にこれほどの憎悪それも偏執的なある謀みを完璧な静寂によって示しているこの純白なる基地を一望に捉えている 全身は今や最後の圧力にひしがれ硬直している そのまま真白な闇へ埋もれてゆくのである 数時間の経過が絶望の深い睡りから頭を拾げついにそこからエルドレを引き上げ徐々に彼の軀を慮してゆく ああこの新鮮な冷気を鼻孔に膨ませて最初の挨拶を六種の木霊の相乗し共鳴し合う中心点で送っているのはもう疾うに雪に埋もれたフネを惜し気もなく見限ってしまった異郷の訪問者なのだ あの幾多の新大陸に漂着し神と女王と肥沃な土地とひょんな幸運を祝福し自らをこのような苦難に陥し込めた諸々の事情と何よりも神々を深く呪いただ復讐の女神エリニウスに誓って土人のように逸物にまで彫物を施した船乗りたちが大地にその髪だらけの顔を埋めて接吻するように一人の男が気違いさながらに雪の中で跳んでいるのだ この飛行場を管理している基地はだが荒れ狂う暴風と厚い雪の層と六つの方角に伸

びた山々の内側でひっそりとこの様子を覗っている。まるでそれが最大の敵意に相応しい歓迎の仕方であるかのように、数種類の立派な紋章をもつ結晶体が躰を蝕んでゆくのに従ってエルドレは逆に冷静さを取り戻してゆく。滅菌状態には慣れっこなのだと言いつ聞かせた。食糧袋の隅に転っている褐色の錠剤を口の中に放り込み舌の上で転がしていると濃のある重い甘さがじわっと液上に広がりそれが喉の壁筋を潤してゆくと全身の血管が活発に収縮を始め尻や爪先が赤くなるほどに火照るとまるで宙吊りの刑を受けたように十センチメートルほど躰がふわっと持ち上がりそれから胤か風船の如くに風で吹かれて広場の南西の隅に辿りつくという魔術が行われる。羊皮紙に認められた預言でもあれば幽霊どもがさぞさわめくであろう。三人の妖婆がいれば蛙とか蝙蝠とか老犬の舌とか豚の尻尾や鶏の頭をぶち込んだ鍋を蒸にかけてもてなしてくるであろう。だがそこは錬金術の工房ではない。つるつるとした始まりとともにあった巨大な岩によって狂り狂り吹雪をよりやくに凌げるに過ぎない崖っ淵なのである。エルドレは赤褐色に焦げつき硫黄臭のする地面に横たわる。エルドレはともかくも緊急にこの地の住民に出会わなければ生命に重大な支障をきたすことを熟知している。広場の下に龐大な機械装置が設置されているということは不時着の際にその電子の唸りを導きの糸にしたのだから間違いはない。そのとき地上にあらゆ

る生物の棲息している痕跡を認めることが出来なかつたのだからそれらは地下に置かれていると推測する。だとすれば何処かにその入口がある筈だ。仮にフネを廃棄したあの中心点がそうであることも考えられる。それならば疾うに彼の到着は知れ渡っているのだからあの最後の圧力に耐えたときに入口を示して呉れたに違いない。しかしあそこのみならず全域において未だに何の徵候もないというのは彼を警戒しているからであろうか。確かにあそこが入口なのかも知れない。だが閉ざされた入口は開くことはない。扉はある種の族にとつて閉ざすためのものでしかないのだから。エルドレは絶望に充ちた確信に有頂天となる。その確信の絶望に充ちた歎びは聖地ラドルでの妹とともに味わつた感情と同じである。あのボウの咲き乱れる丘で情事に耽けていたときにその相手が妹だと分かつた結果エルドレはありとある愛の優しい腕から引き剝がされ神々を呪いただ激しく憎悪の金色に耀く精液をボウの丘に撒き散らしていたのだ。最愛の女は強い自責と悲しみの念だけで淫売のようにボウのほとんどの恋人たちの間に確執の種を植えていたのである。絶え間のない呪いと快樂の絶叫のうちにあの気高い七色の光はたちまち光を失ない混濁し暗黒の帳を降ろしてゆく。エルドレは呪いの丘から逃げ果せた唯一人である。悔恨の季節が訪ずれ幸福に魅入られている筈の聖地ラドルは初めて乾燥の悲しみに包まれる。ボウの丘は

矢張り真つ白な綿毛に蔽われて眼孔の底知れぬ中枢に吸い込まれてゆく おお際限のない不幸と穢れを秘めて聖地のコアはハデスの王とその三つの頭をもつ犬どもの下に悪徳の巢窟となり再びあの美しき愛の交いの丘は瑞々しい潤いに充ちた光り輝く大海原に還えることはなかつたのである エルドレは最愛の妻エレアが妹であると知ったときにこうなることを確信していたのだ あああの優しき乙女が狂気の世界に召しいられたときに何故にも狂気と背信と悪徳の快楽へと沈み込まなかつたのであろうか あの流されたどす黒い病いの血に充たされた海の底へと

一

岩窟に刻まれた扉は開き戸ではない 灯影の妖し氣を揺らめきにも似た地下への最初の暗査は疾りにダイナモの白熱的な好景氣になる 我が主人公“物質の幻惑”は古代史のうちを徨っている ポラリザンオンに関する諸々の作品行はすでに皆既蝕のただなかにペンギンどもとともに金環をみせて結晶している 百数十種の奇態な動植物の浮き彫りに裝飾されている自然石 象牙製の角杯に果喰うグリュフォンやミトラまたは爪先立ち両手を差し

伸べるエロスを高々と頭上に掲げる勇者の宴は祭食の頌歌をあふれ出させている。おおこれら象形のガーターよ、鍵穴や錠前や暗号もなく重力の鳥渡した均合いによって轟音とともに財宝を示すのは母なるインスの言葉である。言葉はさらに言葉を喰いながら大いなる行文に興じている。未来的な断言に過かされている網膜反応は何という風呂屋の安っぽい鏡なのだ。火葬場の窟の高熱状態へとなだらかな上昇曲線を送ってゆく地面の火照りと魚のような臭気を発する硫黄ガスが肢体を充分に浸してゆくとそれに伴いエルドレの緑の望郷は寸断される。白紙の平原の縁辺はそれほど鋭く険呑な切り口となっていて活動期の火山の証拠が叙述されている。だがそれもこの断崖を中心に数百メートル四方の凹凸の部分だけであり右方の崖下には白雪に洗われた古代樹木たとえば月桂樹の幹や枝が骨を刺き出している。左側は漆黒の緞帳を垂らし忌わしく危険な儀式を執り行なり祭壇を思わせるように鬼々妻々とした濃気が漲っている。そしてエルドレの真下では湯立った血潮が炎を吹きながらどろどろ渦を巻いている。谷底のそれらの境界がどのような魔法によって織り分けられているのかは知る術もない。だがその妖婆の鍋底から弾け飛んだに違いない巨石は火山岩でも火成岩でもましてアルケミーの産物でもない。丸くつるつるとしてひとときの安らぎを与えてくれた巨石は古代から宇宙の衰退を凝視していた白亜の卵なのである。そ



れは主の誕生とともにありそのまま解ることなくその悲しみを充溢させて石化したのである。石の周囲を歩いてみると歩数にして十三の聖なる数を得ることができ、表面には無数の図形と目盛りそれに記号が細密に刻まれている。離れて眺めると神々の造りたもうた生命の種々相が蔓草の絡まりのように綴られまさしくあの百科全書の扉となっているのだ。この北極の位置にはピラミッド型の小さな突起がついていて雪の積もっている側から這い上がって覗き込むと数行に分かれたアラビア文字を認めることができる。これこそ名高い最初のアストロラビウムであろうか。表面を蔽っている雪の膜を払い退けると耳を蓋ぐような大音響とともに突風が襲い谷底の灼熱地獄へ誘おうとする。エルドレは「黄金なる永遠の液体激しくも迸しり」という第一行を読み取る。これはあのアル・ファザリー父子の父親の手によるカシータの詩行に相違ない。さらに素早く読み謎いでゆく。「××に夢の只中徨いて」「魔の声音なるか僻いどれの××……」そのときこの巨大な天文器械は千二百年の静止を破ってぐらりと揺れる。熔鉱炉の熱と渦の吸引力が崖の際を浸蝕し始めているのだ。卵石はだが一メートルほど転ったに過ぎない。まだ一メートルの余裕が残されている。エルドレは反対側の底に潜り込み持ち上がった一メートルの球面を調べる。その面には「星の知識の書」というカリスト教徒の作成したアラビア暦表とともに放物面鏡や

円鑿鏡の図とが並べられていて上方に「アルハーゼンの問題の単純化は世界の明解である」という命題が記されている。おおアルハーゼン 光学の父よ 眼球の発見者よ なんといらメールヒエン 匿されていた箇所は今なおびかびか曇き上げられたままの平面である。エルドレは食糧袋の一番手前のポケットからネクトルの入った小壺を取り出しその中身を平面の細部にまで塗りつける。それからかじかんだ手で雪原に対して六十度つまり謎の一メートル四方のびかびかの面に直角に対する穴を堀る。巨石はみるまに谷底の血の池と同じ色までに赤く曇んでゆく。地面がぐらぐら揺れその裂目からは熱湯とともに激しい勢いで蒸気が吐かれている。浸蝕はさらに劇しく執拗に次なる獲物を待ち設けている。エルドレは穴の中に潜り込むと真直に岩を正視する。あのびかびかの箇所が正面に輝いている。何という冬眠 何という冷厳で静寂な磁力なのか。またそれ故に澄明で永却の底なしの智の泉と見紛うほどの透明な光が充ちあふれているのだらう。灼熱に燃え上がりいま巨大な火の星辰に膨れようとしているこの天球の裏面にナルシスの豊かな泉があふれている。その清幽の底から驚きを顔中にあふれ出させたあの愛しきエレアが現われる。おおこの驚きと驚きの身をも引き千切る欲びと欲びのそして耐え難き悲しみと悲しみの相乗作用が一瞬のうちを生じたときに扉の謎は明るみに出されエルドレは胸の裂目に封じられその空洞へ

と羽撃いてゆくのである。聖地ラドルは塩水湖であろうか。諸々の族がアメリカリアの長い脚と丈夫な爪をもつ。海豹は悖徳の第一印象であり紫羅桐花や金蓮花の密生するゴム製保護具の波撃吹を冠る。眼がまず入口である。光は栗毛色から青色への跳躍さらにオレンジの地中海的綜合へと結ばれる。海棲類の絶大なる栄光の輪に承諾された隣い。もしくは謀り事のとめない漢潮。言葉を仮りたメロディはいつしか波々を病ませ水底の爽やかな藻や憎しみを封入した貝たちの上に妖しき緞帳を垂らしてゆく。そこにはアルバの粘土製模型やテルメズの彩釉陶器やまた鉛の容器に就せられた甜瓜が華やかに密封されている。紙上の運命と題する三面記事には警戒嚴重な鉄道を二人の嬰兒が転覆させたと誌されている。聖地ラドルの王であるオルリー公は長い白髪を背に垂らし黄金のこれも長い鬚を逆立てる。珍華な寶石をあしらった儀礼用サーベルを天に掲げて湿润期の生命を祝いでいる。終わりは始められここより始めは始められる。ぬかるみのこの季この丘は栄えある眷族の激動の嵐のために設えられ永えの邂逅に則って至福に充ちたこの日より半歳の間この輝かしき感沢に喜びと涙と漿液をとめどもなくあふれださせよ。輪廻の絆ともいふべきこの祝詞は果ても知れぬ神の代より引き継がれ王の逞しい首には以前に流通させようと企んで頓挫したポッパーの金貨が罪の輝きをもって揺れている。叡智に充ちた眉間の広場また催眠の

大通りは若く香ぐわしい雌雄の高い鼻の声にわきかえっている。儀式はアルカナのまま七色に変幻する優しい叢の中で続けられる。ポウが神の光を溶びて齧やかな菌をつくるとその中に横たわる娘の七色の光沢をもつ髪はポウの魔力によっていっそう美事なものになり娘はその長い柔らかな繊維を縋々たる陽光に靡かせ惜し気もなく白い裸体を開き聰明な水晶の眼を輝かせる。オルリー公の愛玩しているそれぞれ毛色の異なつた七匹の猫が上氣した深い緑の眼を大きく開いて進み寄る。ポウの七色の波がさわさわと揺れ始めるとその奥の方からたたいたたと次第に速度を増してゆく懶惰的な原始のリズムが広がる。王家の指環を管理するように長い尾をびいんと突き立てて歩み寄る牝猫どもは尻と口から甘酸っぱい匂いを撒く粘液をしたたらせている。そうして一斉に白い胸の娘の柔らかな中樞へ赤く怒張させた舌をぶらさげて挑みかかるのである。生後十七日目の幼児を盗んで人形ごっこやボール投げに用いたりままことの材料にしたりした三才の女の子たちのように温かな母の夢をみる。これは母性の夢の形象また花売りに女装して母親の営む酒場を訪れるトルソーだ。カランチョや狐や有翼のスフィンクスに混って巨大な尻を揺すりながら聖地の一方の守護者である真っ黒な象が灰色の牙を天に突き上げる。そのときオルリー公の屈強な七人の従者が大樽に封入されている秘薬を口腔といわず眼孔といわず長い鼻の通路といわ

ず尻の穴も含めてあらゆる壁の奥にぶちまけるおおどろだ つぶらな瞳がいっそう優しく  
潤み白い腕の娘の頭上に何ともいえない不思議な匂いを落としてすでに大きく口を開けてい  
る母なる象の女陰が彼の娘を呑み込もうと誘っているのである 誘惑の作法に則って激し  
く脈動する血筋を腫れあがらせた華奢な娘の首が二つに割れた固い岩の柔らかな芯に吸い  
込まれてゆく この光景に魅せられ痛く感動したオルリー公は環を切った情欲の虜となっ  
て長い鞭のような舌をもつ犬どもと黒人とを相手に自分に課せられた儀式の一コマを存分に  
堪能する ひと通りの悦楽が頂上に達しよとするとボウの苑の最も深んやりと霞んで  
いる場所からエレクトラム製の耳輪をつけたアンドロギュヌスのテラコッタが引き出され  
る 人々はその台座の周囲に押跪し特殊な振動教で作曲された讚美歌を唱う ラドルの全  
貌が共鳴し人々とボウの音楽が神聖な調和を生み聖地の輝かしき秘法が純白の像の趾の箇  
所を唯一の輪廻へと結びつけるのである あの若い王妃白い腕のひとときわ美しい巫女は人  
人にエレアと称ばれている おおエレア エルドレは暗箱の冷えた洞窟の中で叫ぶ そ  
の声のぶつかる向こうから水晶のように燦く人物がまた叫びながらエルドレの方に駆け寄  
ってくる かくして邂逅は異郷の地でなされるのであろうか 呪われた恋人たちは今や相  
手の跡に触れんばかりである おお悪夢はどのような精神作用の変化を促すのдарう 恋

人たちがともに相抱こうとする寸前胸と胸との間には非情な壁がきつて落とされる。厚みのない極度に硬く氷のように凍結し透き通った壁。エルドレは硝子を通した向こうに貼りつき絶望の眼を見開いている人物がエレアではなくエレアにそっくりのそれも女ではなく男であることに気がつかねばならない。セント・ピーターに在留を許されなかつた博士はだが目玉を狙う肉屋から保護してやったカブリの幾万羽の小鳥たちによって天国に置かれている動物どもの楽園に招かれる。この翼のある優しい生き物は籠をあけると空へ向かつて翔び立とうとしていつもその鋭い筋を化粧台や窓枠に嵌められた凝固した泉に端折られてしまうのだがコレラの流行したナポリで修道尼にキッスした医学博士ならばこの忌わしいブリズムを小鬼に命じて取り払ってしまうだろう。エルドレは自分自身の影を凝視している。その影はだが別の生き物のようにエルドレとは異った険しいまなざしで彼を射縮める。おおこの世のものではないエルドレは影などではない。紛れもなく愛しいエルドレ。塞き止められていた欲望が肉体を再生し二人のエルドレの唇を重ね合わせようとしている。何という冷たい感触をもつ優しい接吻だろう。おお彼らは水晶のうちに惹き寄せられ吸い込まれてゆきこの鏡の内部に封じられる。寶石商の裸体の娘が残した金剛石の赤い痕よ。彼らは交わるあのテラコッタの性器のように。だが流され充溢するのは聖地のコアの石炭

袋の暗黒の夥しい液である。無患子の硬い種子に封ぜられて船乗りどもの糧だらけの海図が展げられる。半透明のベルガメントの表面には粘菌類の長い旅と永久運動の鞭毛が揺れ動く。庭園の水晶時計が美に閑するアリストテレスとの夢問答を噴射する。時狩りが鐘を鳴らし断食の一日を告げる。倉の上に並べられている多彩色の壁面は熾象の法のよい標的である。二人のエルドレが重り合った轆轤の中では十三の約数を再び総合して第四の完全数を作ろうとしている。船に設けられた仮面劇場では巨大な張型を振って王国の秘話が再現されている。粗末な壁に括られた棚に差しかかる茶褐色の日光。あの貪欲な繁殖力をもつ小動物に助命された円形の大広間。風琴の物悲しい細工で世紀の恨みを晴らした老女。おお血の儀式は亡霊どもを呼び寄せる。吊り庭は石炭袋に吸い取られるだろう。カタコンブの六つの実験室にはあらゆる塩が網羅されている。恋する悪魔は何処にゆくのだろう。マンドラゴラの谷間には丸木舟に括られた若者が定めに沿って流されてゆく。開門。そこから恐ろしいまでに爛れた蚌を燃え上がらせて囋りょうが若緑に包まれた清澄な水面を滑って出発する大樹の精は岩穴に棲む才走った小男に滅ぼされたのであろうか。青い魚が薔薇十字に辿りつき透明な花弁の下を泳いでゆくと黄金の彫鐫ができあがる。エルドレは胎内で

夢をみるエルドレの藁中でも成長するものがある。そして開門、厚みのない世界から出生したばかりの男の周囲にはこつこつとした岩壁がみられそれはゆっくりと収縮している。長く暗い洞窟のいたるところの窟みには苔や蘚や蕨などの陰性の植物が繁茂している。天井や壁面また地面のところどころに得体の知れない悪臭を発する海綿状の柔らかな岩石がこびりついている。奇麗な岩肌は地下水の重い漂気に被われ暗い穴の中で黒陶の光を帯びている。壁に触れるとその重い輝きが粘液性のものであることが了解できる。そして食肉性の根や莖に付着している鋭い棘が掌に喰いつく。強い酸性臭が立ち、單め獲物を絡め取るうと、瘴氣な蔓が伸びそれらと軌を一にして洞窟の全体が急速に収縮する。エルドレはこの奇怪な運動によって反対側の壁に突き飛ばされる。このように繰り返し弄ばれるうちに衣服のあちこちが裂け背中にへばりついている吸血鬼どもはその破れ目から侵入しエルドレの皮膚を引き剥いでゆく。その運動はだが空洞を消失させてしまうほどの激しさには至っていない。ひりだされながらエルドレは痛ぶりの地震の中を一目散に駆け抜ける。だがその逃走の行手には背中や脇腹や顔面からしたたっているものと同じ色の炎が燃え上がっている。焦げる海、紅に蝕む化石、焼ける蕃藪、面会に来ない父たち。エルドレは吸血植物の触手やその口腔いっぱいには湧き上がるどす黒い唾液に脅かされた。だ闇雲に炎の障壁めがけて身を投げ出してゆくのである。だがそれは純正の炎ではない。あまりに鮮かな炎の彩を



吐く一枚の布なのである。縞縞布は血だるまのエルドレを迎え入れ大きく膨らみ翻える。同時に夥しくあふれる血液を拭い取ってしまふ。緋色の扉はなお一層生き生きと燃え盛りしっかりと出口を遮断する。おお茫然自失の儘立ち尽すエルドレ。大いなる幸運と安逸さにふーっと肺を萎ませ息をすっかり吐き出して完全な脱力状態に陥ったその刹那横あいから高い気合とともに太い腕が伸びがちりと両脇を拘束される。エルドレは眩暈と脳天を貫く痺れと激しい呼吸困難に打ちのめされる。充血した箱が音をたてて倒れ銀色に輝く穂尖を天に突き赤銅色の逞しい腕を重武装で被った二人の衛士に両腕を握えられているのだ。息切れが波頭のように押し寄せその頂点でほとんど窒息しかかり足許に躓を咲かせた金雀枝が熱風に煽られ優しく笑っているのが目に灼きつくと頭の重い蓋が抜け飛んだように軽やかな安息にのめってゆく。その暗いレトロトの細いくねった管を伝って涼々とした莊重な低音がふつふつと昇ってくる。"聖なる一切を穢すものは自然の生理によって自然の汚濁へ還えることになる。"悪霊は地底に転落し世界は灼熱の業火によって誣め尽くされる。"これはアベスタの一節であるるか。甘酸っぱい味覚が夢の中を濁すことによってエルドレは再び混濁した液の底から掬い上げられる。純白の頭布と顔を覆う布によって眼球だけを異様に目立たせた人物がエルドレを取り囲んでいる。それから腕と脚とを頭丈な鉄枷で四

隅に引っぱられ固い寝台に仰向けに括りつけられているのに気づく。柵から抽出した興奮剤と山羊の乳とで醸された呑み物が口腔から喉へ快よく広がる。七人の司祭たちは疾うにエルドレの皮膚を第三層まで剥ぎ終えびくびく跳ねる筋繊維を露わにしている。エルドレはだが皮剥ぎの刑の恐ろしい激痛を覚えるどころか爽やかな解放感を味合いただ澄んだ眼球だけが事のなりゆきを冷静に観察している。高い天井をもつ四角い手術室の寝台のある壁の反対側には竈のある扉が置かれその上でめらめらと揺らめく聖火を中心にして祭壇が設けられている。アフラマズダとミトラの力強い立像がこの室内を跋扈せしめる中にも高揚感を絶やさなれといつた趣きで牛耳っている。神官の最長老と思われる瘠せぎすの老爺がその前に平伏し熱心に祭奠を唱い上げしばらくと永却の炎の中で潜められている白い布を取り出しそれから銅製のリュートンの中で沸騰している赤葡萄酒を宮廷用に譟えられた車の付いた銀の膳に載せて運んでくる。七人の禰宣は「サラマンダー……」という文句を左回りに十一回繰り返してからすでに褐色に煮つまっている液体をエルドレの全軀に注ぎかけるそれから別の小壺に詰められている山羊の白い乳汁を三十回に分けてふりかけ十四本の手で一斉に筋肉と骨の細部にまで擦り込むとそれらの灰色の粘液が発光し次第に真っ赤な炎の舌をあげ始める。沈着聰明な長老がその上で白い布を翻えす。布がエルドレの軀を

包み込むとそれはあわただしく吸い込まれるように熔接され肉体の完璧な曲線をなしてゆくのである。これは正真正銘のサドラである。聖なる肌着はエルドレに与えられたのだ。七人の司祭は倉の上に捧げられていた小山羊の毛から取り出した七十二本の糸をより合わせた紐をエルドレの頭に巻きつけると祭壇に頭を垂れて長い長い祈りに就くのである。灼け尽くすような光の大洪水。残酷で生命の源をことごとく呑み乾してしまふ火刑の大劇場。生物はあらゆる生物の種を狙い己れ以外の生物を絶対的な敵として尽きることのない攻撃を陰湿に繰り展げている。ああそこにもジャンピング・チョーヤの鋭い雨が降り注ぐ。メスキートやオコティヨなどの灌木の密生するすぐ向こうにはサンド・ベルベナの紅潮した丘陵地帯が三日月状に散在している。自衛手段のために果肉を細らしている霸王樹の陰では角蝮や後足の異常に発達した鼠や蟾蜍などが飛び出た目玉をきよきよきよさせながらコロテーや穴熊や狐の夜間に敢行される狡猾な襲撃に備えて防塞を造っている。雛菊やエリオフィラムまたナマの黄色や白や赤や紫の可憐な花卉が蝶や蜂やハミングバードを誘っている。帯から遙か離れた彼方では肌を扶る軽々しい風が数十メートルも砂塵を舞い上がらせ塵可不思議な迷宮のシルエットを紫色の光の緞帳に映し出しましたくうちに古代史の彼方へと包み込んでゆく。十億年もの歴史をもつ微粒子は不規則な風に運ばれ銀

色の星型砂丘を形成し地底を支配する魔王の熱い息吹によってめらめらと赤く怒張している。幾何学的なこれら巨大結晶巨大暗号巨大建造物群巨大人造湖巨人像巨大墳墓巨大性器巨大嬰兒は燦く御影石の屹立する破片である。赤褐色のごつごつした断層を剥き出して滝のような砂の細流が濺々と飛沫をあげているのをはじめにして中途で括れている大きな岩の塊りや宙空に浮かんでそれ自身で大架橋をなしている巨岩さらに誇らしく天の中心を突き上げる数十メートルの直立する巖や波のように無数に拮がる純白の石膏砂丘を一望させて視界を凌駕する丘陵こそは素嗜しく神秘に充ちた天然の大庭園である。ポリフノエ・ゼムレジェリエは永遠の都から一千万セスタースの黄金を吸い上げその中枢である大オアシスには幾種類もの樹木が豊かな水に祝福されて世界のありとある果物を撓わに突らせ鮮血のように美事な夕焼けが棘と毒のある植物の華麗な花の乱舞を染めあげている。おお杜大を無機物の塩辛い砂の海原に浮かぶ夢の苑。だが養気楼は最も瘴猛な園である。そのような銀幕が干上ってゆくとエルドレを囲む地面は枯れかかった金雀枝の絨毯になる。汗を感じる余裕もなく急激に水分を奪われてゆく神殿址では司祭たちのうねるような低い折騰が幻の中に新たなる幻を生み出している。七人の司祭たちは自らの術によって巖のような整然とした永却の形に化身する。エルドレを制した屈強の衛士は青銅の自動人形のように緋

色の帳の両側で槍を擡げたまま硬直している。灌木の茂みも一區の砂に帰している。不動の静寂を背景にしてただ祭壇に赤々と燃え上がる炎だけが一切の生命の収束点であるかのようだ。中空でふん反り返っている邪悪なるものの舌に白い裸身を翻弄させながらエルドレはあの美しき囃の彼方から不吉な砂煙が攻め込んでこようとしているのに気がつく。すでに死の呪いのうちに還りついているがらんだりの建造物は腐蝕と退廃に供されまさに辺りの砂とともに崩れ落ち同化しようとしている。エルドレに施された夢はいったいどのような材質なのであろう。エルドレは勇士の影像から錆びついた鎧を剥ぎ取ると徐々に紅を帯びている掬やか左肌を素早く装着する。身に纏うこの二重の衣はあってはならぬものへの断乎たる拒絶の姿勢である。生命の軀體のように無機物の壇の累積物を焦がしつづけている永却の火がその焔の中に澄み透った玲瓏な鏡を現し武装したエルドレの全身を悉く明瞭に映じている。この眼が映し出しているのは己れなのであろうかと嘆じると炎がひと揺れする度に二人さらにひと揺れすると四人というように風算式にエルドレの影が増え続けその数が四千九十六人に達すると次の十一回目の揺らめきで三百二十四人が加わり十二回目の揺れでは四百六十八人が独自に炎の尖端から現われ総勢四千八百八十八人の武士が十三回目の最も大きな揺らめきでエルドレの前に武装して登場する。精根を使い尽くして神

の火は千数百年の寿命を完りする 第十回目迄に登場した軍勢に十一回目の軍が加わりそれらは二千二十四人と二千三百六十九人の軍団とに再編され十二回目に生まれた残りの兵は二百二十人と二百四十八人の部隊とに分かれる 最も大規模な二つの軍団は槍と弩で武装した歩兵たちであり後の二つの小教精銳部隊は赤毛の駿馬に跨り緑の縞のついた純血同盟の旗幟を靡かせ象の皮を幾枚も重ねた金糸の縫い取りのある褌を掲げ鋭い剣を輝かせて先頭に立ってエルドレの前に進み寄る 絶体絶命の窮地にあつてエルドレは混乱と激しい恐怖を強いられるのだがこれだけの明白な予見を前にするとひらき直りとやけくそによつて支配されてゆくのである そうして危機の深いクレツァスの底から得体の知れぬ自信が湧いてくる 余裕をもつた眼で屈強の軍勢を観察すると兵士のどの顔も同じ眼つき一様の表情をしていて彼らの造作がまったく単一の法則によつてなされているのを知ると親しみさえも感じるのだ だがエルドレの貌と驛をもつ故に最も危険な幻の軍団は彼の目前に迫つてくると天地に轟く雷のように一斉に轟の声を上げる まさに風前の灯という一瞬にエルドレの脳裡にはここで断乎たる無援の逆襲を敢行するよりも何かの拍子であの兵どもの懐に紛れ込めば助かる糸口が手繰り寄せられるのではないかという思いつきが浮かぶ エルドレはだしぬけに先頭の騎馬兵の駒っている馬の横腹に飛び込むとその兵士を叩き落と

し手綱を奪い取ってその馬をまわれ右させ力一杯馬の尻に蹴りを入れて馬群の中に突入する。前進していた騎馬隊の中に動揺と混乱が惹き起こされ馬と馬とがぶつかり合い嘶く馬上から何人もの兵が転がり落ちる。エルドレも馬の横腹から振り落とされ地面を転がってしまふ。混乱は最大の母だと呟くとすぐさま手近の馬をつかまえてひらりと騎上する。それからゆっくりと騎馬隊の殿の方に潜り込んでゆく。まだ興奮から覚めやらぬ馬が前脚を小刻みに地面に叩きつけるのを眺めながら何喰わぬ顔を装って隣りの兵士に何が起こっているのかを問うてみる。だがエルドレの突差の思いつきもここまで来て完全に覆えされてしまふのである。エルドレが声を出すと同時に馬の脚を注目していた隣りの兵士はさっと顔を引き締め馬体を寄せてエルドレの両腕と手綱を奪い彼を見抜いてしまったからだ。すると何の合図もなしに混乱はさあっと引いてしまふ。エルドレの前に道が開け最前いたと同じ場所に連れ戻されるのである。呪縛に充ちた六芒星章の南西に位置する地下の帝國。枯槁した生命の緩る幻想の織物に腐爛した毀壞が唯一の輝きを与えようとしている。"はじめに聖言ありき"。以前にも以後にも何ものもなくことばはまず偽りの姿をとって誕生する不意に訪れる深夜のセールスマンは作り笑いをして靴に隠し持っている怪し気な物体に能書を喋らせる。また場末の呑屋で三人の陰険な目つきをした極悪非道の道楽者たちが男色

を餌に若造にいいようにかかわれるという一幕ものの喜劇を開陳するのも装いのことがその主調音である。不吉な怪物どもの巻き起こす暗い沙塵が迫ってくる中で風韻に惑わされたにしても兵士たちの間に一言も交わされていないことにエルドレは気がつかねばならなかった筈である。とはいえその失策がどのように重大な局面に彼を導いてゆくのかをみるならば偽装工作はもっと逆奉されてしかるべきである。逆転した画面の結果元の映像にたち返るといふ見かけ上の出来事とは裏腹にエルドレの身に逼迫した危機は突にここで改めて解消されたからである。途方に暮れて茫然としているエルドレの前に四千八百八十八人の軍隊は整然と列をなし最大の敬意を示している。声をあげる者もなく不信のまなざしを向ける者もなく最も勇敢で忠実なる奴隷として最敬礼しているのである。エルドレはこの現象を解析しようと試みる。王家の血の故か、運命の好意なのであろうか。いやそれより早く己れの不動の地位と支配力とを熱い血流のうちに覚えていた。二組の友愛数によって組織され統制された極めて専制的な純血同盟の軍団はまさしくエルドレが造物した狂暴かつ従順なる歴史の影である。風化して半ば砂に埋もれた古代の王たちのモニュメントであるスフィンクスが散在している墓の谷と称ばれる荒涼とした嶺地獄の彼方から激しく天空を覆う砂煙が押し寄せている。宇宙に吊られた鏡あるいは火球が邪悪な色彩に染まり



その縁辺は次第に暗黒の侵蝕に屈しようとしている。エルドレは配下の者が深淵の王国から掠奪してきた巨大な悍馬に跨るとあの隊商の列が富と欲望によって鍛えた広大な道を盟友たちとともに墓地に駆け抜けてゆく。その向こうには墓の谷とそこに棲む怪物どもがぱつくりと擲猛な口腔をあげて待ち構えているであろう。墓の谷の中央を横切っている乾上った河床の左側には無数の矢狭間をもつ五十ほどの矩形の塔をつらねたほぼほ長方形の防壁に囲繞された城郭がある。この廃墟の真ん中を二十歩の幅をもつ大通りが貫きいくつかの横道がそれを分断して住民の居住区をつくっている。北部には広場と壮大な神殿が備えられその隣に一角に四十メートルの高さの三つの堂々たる長方形の塔をもつ矩形の宮殿が聳えている。その反対側の岸辺には完全なる円形の壁に包圍された城址がある。これらの文明の夢を潰滅させその死の容姿を守護しているのは世にも恐ろしい怪物どもの群である。粘菌類を巨大化した白色透明の醜悪なる生き物というべきであろうか。あの忌わしい食人鬼やヨグ・ソトホートの呪文によって現われる謎の物怪にとってさえも僻易するような獣腐った魚の眼や臓物や鱗の間から湧き出してくる異臭の柔らかな羽根蒲団。息を封じてしまふような脂の強烈なやすらぎ。おやお辱にまみれぬるとへばりつき納豆の糸が泡を吐きながら彼らのをつくっている菌のつべらばうで得体の知れない交接現場の貌と尻

絨毛もなく棘もなく地獄の蒸気が凝縮しさながら状態の腐物となつてゐるのであろうか  
彼らはその微細な部分においてまず単一の個体でありながらその個々の悪夢の巨大な集積  
という全体で唯一一匹の生き物なのである。動物磁気は彼らの生活を支配する夥しいエネ  
ルギーであろうか。また積された体液の混濁物こそ彼らのメスメリズムであろうか。互い  
に喰ひ合いながらもますます増殖してゆく原生動物の発生原理で何を生み出そうというの  
か。ありとある神々と自然とその被造物に敵意を抱き殺戮に明け暮れる哲学の大魔王たち  
に祝福は常についてまわるものなのであろうか。エルドレは騎兵たちを怪物どもの左右に  
陣取らせ歩兵のうち槍で武装した部隊を横十列に編成し前面に布陣させ最後に弩部隊をそ  
の本隊の左右に位置させる。まず二つの弩手の部隊が雨霰のように宣戦布告の攻撃を始め  
る。と同時に本隊が前進し鋭い得物を振りかざし怪物どもの前部側面を剃ぐように襲撃し  
てから二手に分かれ敵の左右でそれぞれ隊列を立て直す。騎馬隊はそれより少しく時を外  
らして後方を攻撃し後方の左右に改めて陣取る。執拗な剝離戦法と前後左右を常時固める  
完璧な布陣によって怪物どもはその数を減少させられ中央に封ぜられ為す術のないまま巖  
のように硬い一箇の円錐になつてしまふ。エルドレの軍隊は怪物どもを完全包囲し勝利を  
目前にして一層血気にはやつてゆく。しかしこの勇敢な攻撃はそれ相應の輝かしい武勲と

夥しい犠牲によって成し遂げられているために騎馬兵と歩兵の約半数が怪物どもの触手に捉われ半透明の袋の中で液という液を悉く吸い取られ無敵の塵と化して砂漠の歴史に回帰しているのである。とはいえ造物主であり策謀に長けた軍師であるエルドレの足許からむくりと影が起き上がり犠牲者と同数の勇者を生み出している。だが影が篡奪されるに従いエルドレは疲労困憊しました兵自身の影も薄くなってゆき軍勢は弱体化している。最後の攻撃によって決着は早急につけられねばならぬだろう。まさしく今こそが圧倒的な布陣の下に優勢なのだから。一斉攻撃の号令が発せられようというときにだが半数の兵をくわえ込んでいた怪物どもは凝縮を続け円錐の尖端に雷光を帯びそれから細密な罅を生じいきなり以前の三倍の大きさに膨れ上がりその数は増殖することによって一撃に十倍になってしまふのだ。おおこの巨大化現象は攻防を逆転させてしまふに足りるのであろう。エルドレは全軍に退却命令を下すがその伝令が駆け出して最中にも怪物どもの逆襲は殫力を極めエルドレの影はますます薄くなってゆくのである。猛威を振るう邪悪な粘菌類は容赦なく体液を求めて絡みつく。軍隊は鬱気様だ。エルドレはもはや立ち上がることも能わずにじりじりと地を這って逃げ回る。今にも光と同化せんとする幻の純血同盟もただエルドレの姿の写し絵である。灼けつく光の大攻勢に乾ききった熱い岩肌を露わにした道の際を越えそ

の際に踊り込むとエルドレは岩の間に不思議な植物が匿されているのを発見する。掘み上げるとちくりと指を刺すのである。褐色に萎びて今にも崩れそりを屈曲した莖がさつと青み帯びるのを見てエルドレの記憶簿の頁に彩やかに朱で記された秘華葛ということばが浮かぶ。毒には毒と咬くと最後の力を振り絞って秘華葛の干莖を吸血鬼どもに投げつける。エルドレの消え入りそりを影たちもてんでに投擲する。おお海綿様線肉質の内部をもつ莖は液体の獣に突き刺さりその汁を瞬くうちに吸い込んでしまるのである。ぐえーっという低い叫びが谷を揺動するとみるみる成長している植物に絡みつかれて怪物どもはどんどん小さくなってゆく。今や塵と化した怪物どもは彼らと入れ替った莖草の茂みのうちに密封されているのだ。何という对症下药の見事なる勝利であろう。怪物の呪縛で実に数千年の荒廃を余儀なくされていた城は栄光も彩やかな祝福に充ちて燈気楼のように荒涼とした砂漠の真ん中にその華麗なる姿を浮かび上がらせる。神々と呪わしきものたちとの諍いはここに終結をみるかのようだ。だがその邪悪なる物語は姿の定かならぬ主人公と同様の姿態を取るに過ぎないだろう。滅びるものはあらゆる滅びの予見である。蟻地獄の逆円錐の壁に囲まれた底では鬱蒼たる悪魔の殖木がすでに赤褐色に萎えた不吉な陽光に映えて妖しい気配を漲らせている。聖らかな至福に充ちたボウの叢とのなんとという対照。母と妻と妹の

三位一体であるエレアとの恋はいづれに属すのだろう 闇に囁くものたちの勢力が拡がるにつれ再び蘇ってゆく火と鏡とを材質にした逞しい武士たちを率き連れてエルドレはもう洞いと呼び戻した河の右側に高く堂々と聳える円形の宮殿に赴いてゆく 唐草のびっしり絡まった城壁を取り巻く幅の広い濠には巨大な跳ね橋が渡されている 音もあげずに橋が跳ねるのを振り返りながら無数の矢狭間の並ぶ二つの円筒に挟まれた拱門に進んでゆくとその奥から明るい光とともに優雅で澄明なソプラノが和し甘美な娘たちの匂いが漂ってくる 城壁と円形の宮殿との間で輪を描いている庭園には色とりどりの花もさることながら涼し気に幾つもの噴水が高々と舞い上がり内部から綺麗な光を放する漏刻がそのひとつひとつの側に置かれている 武勇を誇ったり愛を主題にしたり或そかに押々を讃えたり例えば木に縛りつけられた金髪娘とそれを襲うタイガーその娘のほだけ九胸を露から覗きみるハンターなどといった野外劇あるいは仮面劇を思わせる大小の立像が花苑や小鳥たちの囀る叢林の中に幾多並んでいることだろう 宮殿の高い入口は成金好みのこてこてとは異なる絢爛でありながら上品な装飾が施されていて当主の趣味の良さを感じさせる その図柄は銅を際立たせた四大の精霊のもので透き通るが如くのレリーフである この宮殿の一階中央には縦に二つの矩形の大広間が覗き廊下のように並び壁全体をカンヴァスにした絵に

は古今東西の動植物及び建物山脈運河湖が散り俵められその手前の部屋はありとある絢爛豪華を快楽が象徴され奥の部屋には崇高な神々の園が美事に描かれている。高い天井に貼りつけられた星座は明るいシャンデリアに隈なく映し出され幻想的な物語が繰り展げられている。黒檀の円テーブルや大理石の籠やマントルピースには細やかな彫刻が絵巻物のように飾られ金銀の食器には酒や数百種類の料理が盛り込まれている。二つの広間に狭まれた造型の渡り廊下の中央に極めて深い井戸が掘られていてそこから豊潤な匂いを蒸えた黄金の美酒が湧き出ている。これらの中央を貫く通路の外側に沢山の数の個室が割り当てられそのどの部屋からも必ず二階へ通じることのできる螺旋階段がさらに外側に太い帯のようにして備えつけられている。屋上の庭園の真ん中に尖塔のような天文台が設けられその天文器棟には蚤たちの製造した精巧なレンズが使用されている。快楽の広間に頼やかな胸をもつあらゆる種族から選りすぐられた娘たちが幾千人といふのだらう。娘たちは細い絆にびったり嵌着する綿子織の胸や背中や太股の部分の切れ込みの深い衣裳を付けその中にはときおり糸も纏わずに優れた肢体を晒している者も見受けられる。大きな踊りの渦は強大な吸引力を備えいかに火と鏡とを材質にした四千八百八十八人の屈強な若者といえどもたちまち呑み込んでしまうのである。槍や柵や鎧や剣などの武器を悉く解除した若者たち

に聲せ返るような娘らの裸体が絡みついてくる。様々の形と組み合わせの豊富さで構いが繰り展げられる。大食漢は百二十の大皿に盛られた料理と三十の大樽に詰められた強い酒を平らげてしまふ。そのような大食漢が少くとも五百人はいるのだ。性豪は一度に千人の女を相手にし五十回の腎水を進しらせる。喉の良い者は古今東西二千の歌を披露する。そのどの一つをとりあげても一千行に及ばないものはない。力自慢の男は朋友の愛馬四百六十八頭と指揮官の巨大な悍馬を鎖で繋ぎ城外に引きつり出し深い濠の底に叩き込んでしまふ。男たちの荒々しい咆哮と唾び泣くような女たちの激しい吐息が唱和しその切れ切れに獣の断末の叫び鞭の唸る音や神々を呪う罵声や糞尿の臭い乱れ飛ぶ血に噎せて惹き起こされる嗔や嘔吐そして人肉の香ばしい匂い骸骨のからからぶつかる音や決闘に一瞬休止符を叩かれどっと湧き上がる響動めき蛇や嬰兒を弄んでの笑い酒瓶の粉々に砕ける音や火の燃え上がる凄まじいバスそして狂気のソロが高々と歌われ尻をびしゃびしゃやるリズムや転がる食器やテーブルの上での複雑な構い変化に富んで組み合うもの大喧嘩大乱痴氣にかなりな数の乳房や首や陰莖が供託され尽きることのない快楽の交響曲は壮大な仕上がりに向かっている。構いに食傷し強烈な乾きを覚えてエルドレは宮殿の中心にこんこんと湧き出る泉であの聖アントニウスの伝説にある数千の味覚を充たすという靈液を流し込み喉が

洞ってゆくと蚌の芯からめらめらと精気が立ち昇りその奥に通じている神々の広間へと誘われる。グリュフォンが人頭を踏みつけているさまを彫り込んだ莊重大扉を押し開けると老女が柩に横たえられそれを囲んで若いびちびちした生け替たちが裸のまま跪いている。天使のように美しい姿をしている十一才以下の少年たちと頬を血色に染めた可憐な少女たちが十数人づつ両側に膝をついて並び形のよい尻と胸をもつ二十才をようやく越えたばかりの選り抜きの美女数人が老女の頭の方に座っている。兼食を気持ちと淫らな情欲とが聞き合っているエルドレは柩に近づいて覗き込む。老女の容貌は気品のある鼻骨を中心にしてよく整っている。どこかで見覚えのある顔だ。だが過去は弔われつつある。黒塗りの柩の中で老女の唇は青みを帯び昔の榮耀を刻みつけた細い裸体は透き通るように白くなる。かすかな咳きが唇から洩れようとするがすでに力尽きただ頰の筋肉が顫えるばかりだ。そして異様に大きく種んだ碧の髓がその奥にちらちら赤い炎を揺らめかすとエルドレをじっと凝視するのである。その最後の瞬間にエウスタキヤ管は開かれたのであろうか。尋常ではないことばの形に打撃されてエルドレは一挙に狂乱の影を帯びる。荒々しい声で少年と少女たちに向かい合って並ぶように命じるとよく撓り鞭を各自に持たせ互いを打ちのめさせる。彼らの無垢な蚌はみるみる蛇蛸腫れを呈し蛇神の手下どもの無残なる果腹と化する。



エルドレは素裸の乙女たちの尻を情容敵なく鞭打ち前と後とを抜いて気をやりながら腰の短剣で豊満な乳房や美しい首筋をひと握りて刺ねてしまふ。さらに少年と少女たちにそのどくどく溢れる血を食るように命じその血と棘の饗宴の中で次々にまだ硬い蚌をもつ子供らを襲い肉と銅でできた二種類の剣の餌食にしてしまふのである。それから祭壇を蹴倒しその火が脱ぎ捨てたばかりの衣から神々の壁面に燃え移るのを確かめるとやがて柩の中に踊り込む。エルドレは最前死んだばかりの老女を凌辱する。まだ生温いよく美を極めた臍と肛門の中に夥しい液を注ぎ入ると老女の蚌は死の姿のままみるみる若返る。おお何という素晴らしい悪意。その至上の美貌はまさしくエルドレの突母の体である。猛り狂り逸物はだがなおも激しく漿液を噴き出すのである。少女の愛らしい姿から無邪気な子供へとさらに純白の嬰兒へ退行し聖なる胎児の歴史を逐一回想してゆくとそれらの肉は消滅しエルドレの蚌にはただどろりとした邪悪なる液体が残されている。柩の周囲に崩れている屍体が一斉に腕を上げ天井を指さす。エルドレは飛び起きると部屋隅に設けられている螺旋階段をぐるぐるぐるぐる駆け上がる。二階には「賢者の階段」。「エリクシルを調整するときの輝かしい石の書」。「秘密を開明することの書」。「そしてあのグーベルの「慈悲の書」や「濃化の書」さらに有名なるヘルメスの「偽デモクリトスの書」また「天球分割の理解の

終局〃などという金箔で象嵌された題字をもつ古代の書物を麗大な書架に収蔵した立派な図書館や歴代の騎僕やその眷族を讀えた彫像や愛妾たちの肖像画を飾った美術館がある。だが今や紅蓮の炎に包まれそれら真墨の文明は滅びようとしている。階下ではおよそ一人の若者がそれに殉じている。屋上の空中遊園の花々は炎の中で妖しく揺らめきその絶世の彩やかさは大饗宴の供物と化した焼け爛れる人肉を滋養にしているかのようだ。エルドレは階段を昇り切り中央に鋭く聳り立つ天文台に入り込みそこから空を見上げるとありとある喧嘩がまるで他所事であるかのような美しい光景が展開されているのを知る。おお天を視よ。漆黒の夜空には流動体の火が流れている。様々の色特に紫や赤に変化する一条の焰から薔薇色の光沢をもつ色彩が発せられる。宙宇に一つの手が現われ薔薇色の光沢はまずその背後に密着しそれから包むようにその周囲を優しく舞っている。地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中樞に大洪水を齎すのである。その色彩と手とはゆるやかな弧を描き彼方へ去りゆこうとするが今にも消え入ろうというあたりで停止しその地点に明るい光が現われる。手はそこからさらに後退しようとするが突然鳥に変貌してより自由に飛翔する。そのうち羽撃く大鳥は石のように硬直してなおも飛びまわる。それは最初真珠色の光沢をもっているがついには黒色に至ってこの天文台目がけて遂ちてこよ

うとするのである 空と地はこの天文台に向かつて近づいてくる 周囲の色は灼けるよ  
うな鮮紅色だ あらゆる物質は焙かされてゆく エルドレは世界の混淆とともに何処へ流さ  
れてゆくのだろう 出入口といえはあの青銅の衛士の守護する緋の扉しかないというのに

## ガリー船・作品言語

＊

この長ったらしい名称をもつ寄稿誌は来春までに三号を刊行して終了するという限定性をもって誕生する。尖鋭的なことばと形態とをもった詩篇は能う限り登場するであろう。

ガリー船は満載のことばによって美事に沈没するであろう。シャルル・ノディエの述べるように「こうした性格はまさしく夢のそれなのである」（「スマラ」の序、秋山和夫訳）

＊

「フネ」という略称はここでは古代ガリー船のことでありまして、作品言語の冒険行を「誌」という乗物を仮りて、右に行くやら左へ流されるやら空を翔けるやら地の底に潜るやら知れず、大いに自家航海を満喫しようとの意気地からでたものでございます。どうもちんまりした詩人の多い中でこんなこととして

みるのも粋じゃありませんか。このフネ、ヤケに長い船名をもつとしてもただ気障というだけではありませぬ。人に格がありますように本に本格がございまして、その本格が膨張宇宙のように無限の果てにあるという訳でございます。イエ／＼、エス・エフのお話しじゃありません。えっ、では何でガリー船かとお尋ねになりますか。別にガリー船書込んで、なんていうエネルギー主義だけではございやせん。ノアの箱舟ならば神サン任せで、へ、結構なことでございますよ、が、こっちの方は手前で漕がにゃならない。船乗りどもが好き放題に漕がばしゃばし水を掛け合いつこしたりのア斐性なしばかりでもフネはよろよろ動くんですから、ことばのカクもてエしたのか。ことばは隠して尻隠さず、イエ、尻どころか貧乏の所帯の色気なんかのない睡言までも露わになさる人品卑しい方々より、へえなんとか人格までよろしく見えるように。

\*

寄稿誌などというものは詰まるところ作家の数だけの詩集にならねばならないといいつつ、冒險的な意気とその上でのポルテージといったことを中心に、小生の狭い識見でこのような本を編んだのですが、生まれ出て初めての謀み及び編集とはいえ、出来不出来に関する厳しいご批判は大いに頂戴する所存にございます。

次号の原稿締切は十月末です。広く寄稿を願う次第ですが、掲載の基準とは何よりも冒險的実験的なものであるということで、他は二の次となります。採否等のお問い合わせには可能な限り応じたいと思います。送付先は拙宅まで。

(紙田)

地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中樞に大洪水を齎すであろうか

創刊号 フネ

編集発行人 紙田 彰

東京都杉並区梅里二ノ十二ノ十五

電話(〇三)三三三三―五八一三

印刷所 武蔵野タイプ

印刷日 昭和五十年九月十日

発行日 昭和五〇年九月十五日

頒価 五〇〇円



額価 500円